



丸岡ロータリークラブ
2010～2011年度 テーマ
寛容・忍耐・好意・感謝・思いやりの心
～人のお役に立つ奉仕の実践～



9月卓話版(13:00～13:30)

忘れる前に、もう一度

会長 林田恒正 幹事 高尾 誠

9月3日(金) 1582回例会

川村文雄ピアノコンサート 例会



皆様こんにちは、今日はこの会合にお招きを頂き本当に嬉しく思っております。

実は、何をお話しどう進めてゆけばいいのかまったく分からないまま今日を迎えました。

まず、私がなぜピアノを始めたか、また続けることが出来たかを簡単にお話させていただきます。

私の実家は本屋を営んでおり、私が生まれる前に母が父の趣味で集めていたレコードを何時も聞いていました。おそらくそのころから胎教のような感じでなんとなく音楽に触れていたように思います。生まれてからも遊び半分で父がヘッドホンを僕の小さな頭につけたりして、自然と「絶対音感」というのが身についたように思います。三歳から四歳のころたまたま保育園のバザーで買ったオルガンを、僕が一人で遊びながらそのレコードの曲を弾いている姿を見て、ピアノを習わせようと思ったのがきっかけでした。そのころのことは余り記憶にありませんが、多分好きで続けていただけのことだと思います。

しかし、ピアノを習い始めてみるとすごく厳しい世界だという現実がぶち当たって挫折しそうになってしまいました。でもそこを母親が「続けさせてくれ」とピアノの先生にお願いをしてくれたお陰でやめずにすみしました。「継続は力なり」といいますが最初はずまらないと思う「基礎練習」でも続けているうちにだんだん弾きたい曲が弾けるようになってきました。そうすることが「あ～ピアノって、こんなに面白いんだ」とか「こんな曲が弾けるんだ」と手ごたえを子供なりに感じるようになりました。最初は本当にいやいや練習をしていたのが少しずつで出来るという実感が持てるようになり、徐々に楽しくなっていく感じでした。

まず、はじめに私がクラシック音楽には「こんなに素晴らしいピアノ曲があるのだ」と最初に衝撃を受けた作品を皆様に聴いていただきたいと思います。演奏するのはショパンの連想即興曲です、では一曲目をお聞きいただきます。

(演奏)

有難うございました、今演奏した曲はショパンが生前発表しなかった曲です、その理由は定かではないのですが、ショパンという作曲家は自分自身が完全に納得のゆく作品のみを出版し、決して妥協をしない作曲家でした。自分が亡くなった後は出版されていないすべての楽譜や譜面を破棄するやうにと遺言が残っています。しかし、ショパンが亡くなった後にいま演奏した曲を始めとして楽譜を見た多くの関係者がとても破棄するには忍びないと、結果的にショパンの遺言は受け入れられなかったが、そのお陰でこんにち私たちが演奏したり、聴いたり出来るのです。「芸術の世界」特に「作曲家」というのは自身のプライドとか拘りがあります。画家の世界でもありますが、生前にその魅力が皆に理解されるとは限らないので、この作品もそういったことがあって、ショパンの死後に広く愛されるようになったという作品なのかとあらためて感慨深く思います。続けて演奏させていただく作品もやはり同じようにショパンが亡くなってから時がたって発見された楽譜なのです。

この作品は「戦場のピアニスト」という映画のBGMで使われ大変流行した曲です。

「ピアノ」という楽器は弦をハンマーで叩くことで音を鳴らせる楽器、いわゆる打楽器です。けれどもショパンはそういうメカニズムの楽器とは思えないような音の配列、並べ方でまるで語りかけるようなメロディを作っています。そのようなことが随所に垣間見える名曲のひとつです。実はショパンがピアノの詩人と云われているのは、どうやらこのあたりからきているのが実感される作品です。続けてノクターンの遺作をお聴きいただきます。

(演奏)



ありがとうございます。私は国際コンクールに始めて参加し、いきなり受賞いたしました。日本のコンクールとはとは異なり海外のコンクールというのはそんなにピリピリしていません。お祭りみたいな感じでみんな結構楽しい雰囲気です、いろいろな国籍に人が一堂に集まってくるのです、たとえばあまり経済的に豊でない国の参加者は村中から資金カンパで参加しています、そのお金で参加した方々はコンクールに対して必死になります。

そのコンクールのときに、すごく驚いたことは一次予選のときに自分と同じ年代（22～3歳）と思われ

る女性が一次予選を通過することが出来ず、その結果を見るなり車が走っているところへ飛び出して「私はもう帰れない、ここで死ぬんだ」と、あの時は本当に衝撃を受けました。

ある指揮者の先生にお話を伺う機会がありました、「日本は西洋音楽に限らず文化に対してどこか冷たい国だ」と。例えば音楽家に対してみんなで育てていくことや、活動の場を与える意識がなかなか根付かない。ですからどうしても「冷たい」といわれる由縁です。

しかし、それと同時に「非常に甘い国だ」とも云われました。これは私が忘れられない言葉だったのです、「甘い」と云うのは、最近自分が大学で生徒を教える立場に成ってそういうことを感じるのです。ピアノはどこにでもあるし、確かに誰でもコンサートも企画も出来るし、そういう意味では本当に恵まれている環境にあります。

かつてはよくハングリー精神なんていわれていましたが、大切なのは精神的に自分がそのことをやっていく事に対する持続意識です。まず自分自身の身の丈を知ってそこからじっくりと詰めてゆくということが最終的には自然な形で道が開けてゆくのではないかと、そんなことを感じたりします。ではショパンのバラード第一番をお聴きいただきます。

この作品は、まだショパンが創作意欲に溢れていた若い時期に約七年掛けて作った、非常に手の込んだ大曲のひとつです。演奏時間は九分ぐらいですが、約七年掛けて作られた曲なのでさまざまな気候や音楽的なメロディ、あちこちに創意工夫が盛り込まれたドラマチックに仕上がっている作品なので大変人気がある作品のひとつです。

私自身この曲は大変好きなのです、しかし難曲なのでなかなか思い通りに弾けることが少ないのですが、ぜひ皆さんに作品を知っていただきたくショパンのバラード第一番を演奏させていただきます。

（演奏）

どうもありがとうございました。さて、次はショパンから雰囲気を変えドビッシューという作曲家の作品をお聴きいただきます。ショパンより少し後の時代のフランスの作曲家です。

どちらかという絵画を見ているような同じピアノの作品です。まったく趣の違う曲を二曲続けてお聴きいただきます。第一曲目は「アラベスク第一番」です。アラベスクというのはアラビア風という意味でアラビアの伝統工芸品にある唐草模様を音楽に表現したジャンルの作品です。二曲目は大変有名な作品で「月の光」という月の描写です。「静と動」いろいろと月が照らす風景であったり、あるいはその動きで有ったりすることをピアノで表現する名曲の一つです。

私自身の持論ですが演奏家というのは芸術家という括りの中で、芸術家というのは創作をします。演奏家というのは作曲家と聞き手の間にいる存在という意識を持っています。特に、ドビッシューのような曲を演奏するときには気をつけないと、その作曲家がその曲で何を表現しようとしているのか、作曲家の思いを想像しながら見極め自分の演奏をします。原点に立ち返り真っ白な状態で楽譜を見たときに何が見えてくるか、そういったところを大切にしています。それではドビッシューの「アラベスク第一番」と「月の光」をお聴きください。

（演奏）

どうもありがとうございました。また、趣が違う作品で独特な和音の響とかを楽しんでいただけだと思います。やはり音楽というのは言葉がないのでその分音そのものがダイレクトに入ってきます。芸術という絵画とか文学とかありますが、音楽というのは「一番耳にストレートにあるいは心に訴えかける力が強いんだなあ」と私は考えています。それを伝える側としては作品が持つ魅力はもちろんのことその内側をしっかりと読み取りながら、「自分自身がただ感動するだけではなく共感するということがすごく大切なんだあ」ということをつくづく感じるようになりました。

今学生を教える立場にいて感じますが、生徒はその辺りを良く見ていないのです。自分はこう弾きたいとか、自己主張をするというのは大切だと思いますが、しかし日本人はどちらかというとそのような空気を読むというか、自分よりもまず相手が何を考えているか、何を伝えたいのか、そういうと

ころを読み取ったり、あるいはそこに共感するという能力が高い民族であると私は勝手に思っているのです。だから、西洋音楽や他の芸術を受け止めることができるのだと思います。ただそれを発信してゆくときに難しく、私も日々いろいろと勉強しながら今の教育者としての立場でそれを伝えてゆく難しさを痛切に感じています。レッスンとかでアドバイスを生徒にしても それを自分が感じている通りに相手も同じように受け止めてくれないで皆自分の都合のいいように解釈したりしているので、そのあたりを向き合って、ピアノの場合はマンツウマンレッスンなのでそのようなやり取りが大変なのですが、これが逆に考えさせられるところから、また自分自身の演奏がどのように伝わっているだろうかと考えたりして、本当に毎日毎日が勉強という感じです。残りの時間が少なくなってきましたので今度はリストという作曲家の作品を二曲続けて弾かせていただき終わりにしたいと思います。一曲目は「愛の夢第八番」そして二曲目は「ラ・カンパネラ」という作品です。「愛の夢」というのは元々歌曲でそれをピアノソロにリストが編曲したものです。「ラ・カンパネラ」といのはバイオリンの原曲なのですが鐘の音を表す「カンパネラ」という作品をリストがピアノソロに編曲してそのアレンジのほうが素晴らしいのでピアノ曲のほうが有名になってしまったという作品なのですが、ピアノの魔術師といわれるリストの代表的な二曲をお聴きいただきます。

新世代委員会

桑野賢吾委員長

丸岡ロータリークラブが応援して丸岡町出身の川村文雄ピアノコンサートを開催いたしました。川村文雄氏は第23回ポッツォーリ国際ピアノコンクールで最高位とロータリー特別賞を受賞し、現在は各地で様々な活動を展開しています。

このたびは丸岡高等学校文化祭の行事と共催し、地域の青少年や一般市民の方々に、丸岡町出身で世界で活躍している川村文雄氏を知って頂きたいと企画しました。

「感想」

丸岡高校の生徒達にとって、その本人が自覚するか否かは解らないが、とても素晴らしい演奏であった。さすが一流の、それも世界に通用するピアノ演奏とはこれ程のものかという衝撃が走った。

川村先生も、長時間にわたって静かに聴き入っていた生徒たちを褒めておられたので生徒達にも川村先生の『感性』の何がしかは伝わったのではないかと思う。いや、絶対に伝わって欲しかった。技術もさることながら、演奏者の“魂”が強烈なウェーブとなって『聴く者の魂を揺さぶる』そんな印象を持たされた。同じような思いを持った生徒達が何人かいれば第2、第3の世界的音楽家が丸岡高校で輩出されるのではないだろうか。そう期待したいし、そうなれば、丸岡RC支援の今回の演奏会は大成功である。



永昌 子 楽 月 2010年(平成22年)9月9日(木曜日)

熱中できるもの探して

ピアノリスト川村さん
母校丸岡高で演奏、語る

国際舞台で活躍する数 川村さんの母校での演奏は5年ぶり2回目。丸岡ロータリークラブが同コンサートが3日、母校の文化祭に合わせ招き、生徒や父母ら約70人に演奏を披露、自らの0人が聴き入った。川村歩みを紹介し「熱中できるものがあれば、それで十分」と語り掛けた。「スケルツォ第2番」や

自らの経験を生徒らに語る川村さん＝丸岡高

シューマンの「アラベスク」、リストの「愛の夢第3番」など名曲の数々を披露した。

演奏の合間には子どものころ過した丸岡町の思い出を話し、「4歳で中古のオルガンを買ってもらい鍵盤を弾き始め、小学校時代はポピュラー音楽を夢中で弾いていたと紹介。当時夢中になった経験が後々の励みになった。夢中に思い出さず自信を取り戻すことができた」と語り掛けた。その上で「勉強でも部活でも熱中できるものがあれば十分見つけてほしい」と述べた。



新世代のための月間

「新世代に寄せて」

地区新世代委員長

北島 括 (福井ロータリークラブ)

皆さんこんにちは、数年前にも一度卓話に寄せていただいております。そのときは地区の新世代委員長でしたが、今はインターアクト委員長ということで、宮崎カバナー以来かれこれ12年間になります。その間1年間だけ休みましたが、ずうっと新世代を歩んでまいりました。今日はクラブの皆さんに久々お会いして嬉しく思っております。現在インターアクト関係ですが、新世代月間ということで新世代についてお話を進めてまいりたいと思います。

規定審議委員会が出たEクラブについて少しだけお話しすると、今地区内で何人かが立ち上げようという話が出ています。しかし運用の仕方が難しいのではないかと懸念いたします。先日も次期ガバナーの今西さんと幹事長の片岡さんにうちの地区だけで運用できますかねとっておったのですが、日本全体でEクラブに対しての取り決めをしないと、2650地区だけが突出してもいけないと思いますので、地区としてもこの運用をどうするかを考えないとEクラブは難しいと思います。でもクラブに都合で出られない方とか病気で出られない方々には良いかなあとも思ったりします。



Eクラブについて

Eクラブは、欠席した例会の単なる埋め合わせだけを目的にしたものではありません。会員は、会費を払い、社会奉仕プロジェクトを実施し、ウェブサイト为例会場として利用するという以外は、ほかのクラブと同じように機能します。オンラインでの例会中、参加者同士が互いの顔を見たり、声を聞いたりするため、Eクラブの会員は、マイクとウェブカメラを使用することが出来ます。Eクラブには、すべてをオンラインで行うクラブと、部分的にオンラインで行うクラブとがあります。部分的なEクラブは、会員同士が直接顔を合わせる従来の例会も開きたいと考えるロータリークラブにふさわしい選択肢となります。クラブ会員の義務として、地元の社会奉仕プロジェクトに参加する会員も多数います。しかし、良く状況を想像しますと、人間の脳と五感を捨てるような感じがします。平べったい画面と向き合いながら相手の思いも感情も伝わらない、そして相手も同じような思いではないかと思われまます。ロータリークラブは第一に親睦からなのにそんなロータリークラブなら何の意味も無くなってしまおうと思います。(ロータリー情報委員会)

☆新世代奉仕委員会

さて3月の規定審議会案で219案ございます。219案の立案の中で実はもう既にご存知の「10—87条で五大奉仕部門に青少年委員会を加える件」とあり、青年奉仕委員会となりましたが、これが修正採択され「新世代奉仕委員会」となりましたので、クラブの定款も新世代奉仕委員会となり、既に年度始めから発足しています。長い間青少年委員会が奉仕委員会になるべきだと規定審議委員会に上程してきましたが、規定審議委員会に取り上げられ採択されながらRIの理事会で4大奉仕以外はつくりなないと否決され続けてきました。そしてようやくここに来て今まで社会奉仕委員会の特定分野としての小委員会でしたが、五大奉仕部門に格上げがようやく認められました。

と同時に5歳から13歳までの子供たちの支援としてローターアクトクラブの創設が決議案として採択されました。このお陰でインターアクトも12歳から20歳までよいとなりました。

ローターアクトクラブについて

今年4月に国際ロータリーの規定審議委員会で、ロータリーの4大奉仕に新しく新世代が加わり5大奉仕になります。また青少年の名称が新世代に変更されます。そして同時にその規定審議会で、5歳から13歳までの子供たちの支援としてローターアクトクラブの創設が決議案として採択され、義・勇・仁・礼・誠・名誉等を教える奉仕活動を奨励するように承認されました。これは新世代をこれから重要視する表れだと思います。(英語で表現されているものを最もふさわしい日本語、義・勇・仁・礼・誠・名誉で表現しました)(ロータリー情報委員会)

☆ 新世代グループ

新世代グループには新世代委員会とインターアクト・ローターアクト・特別基金委員会そして青少年交換委員会と5部門があります。新世代特別基金委員会では、10万と20万の双通りがあります、育成の講師とかの場合幾らかと決められています。ただし内容的には子供に関したことが条件のようですが、名前だけといったような冠大会には出ません。クラブが主催する子供たちのための事業に対して補助するようです。年間約500万補助されます。これは皆さんから拠出いただいた1,000万円と世界大会からいただいた1,000万円で運用されています。なお、助成金の申請は12月までとなっていて、これが地区大会で発表されますので、はやめに子供たちのフォーラム等の事業を展開して申請してください。

☆ ライラ

新世代委員会のライラですが、今年は実施いたします。去年は新型インフルエンザでライラや私の担当する海外研修も中止となりました。今年は来年の5月21日～22日に天理市で開催されます。また同時にロータリーアンのプログラムも同時に進行されますのでぜひご参加をお願いいたします。

☆ ローターアクト

またローターアクトについては12日(日)に県内インターアクトにも呼びかけ百数十名で福井市のJR駅西口から商店街を中心に落書き消しやゴミ清掃を行います。このような落書きとかゴミを道路に投げる行為に“社会に大変迷惑をかけている”と感じてほしいと思います。

☆ 青少年交換

青少年交換ですが以前に比べ50～60%減少しています。地区で10名程度で寂しい限りですが、実は今年度久々にアメリカから受け入れまして先月の20日頃に来ました。背の高い男子で久しぶりの受け入れで以前のことを思い出しながら進めています。青少年交換も始めると大変面白いプログラムですので、ぜひ機会がございましたら一度挑戦していただきたいと思います。

☆ インターアクト

インターアクトでございしますが、メインの行事として海外研修を行っています。今年はカンボジアで大袈裟な言い方になりますが支援をしてきました。子供たちが自分たちの手で募金をしたものを持って行ってきました。そして向こうで授与式を行いながら活動してまいりました。活動の一つですが、京都の西陣織の若い方々が桑を植林し桑の森を作り蚕を育て繭を取り絹糸を生産して絹織物を作りクメール織りという伝統産業を再現しているところですが、その子供たちに学用品を贈呈し桑の木を植樹したりはたを織ったりして参りました。子供たちの感想文では「生きることの大切さ」が身に滲みて感じたようです。そして、ホーチミンでは戦争博物館を見学し両国を通じて「命の大切さ」を身をもって感じて帰国いたしました。

今日は「新世代月間に寄せて」として30分お話しをさせていただきました。大変有難うございました。

※規定審議会で承認されてもR I 理事会で決議されなければつぎの機会にまわされます。

(ロータリー情報委員会)

社会奉仕委員会報告

林田数一社会奉仕委員長

ボランティアのつどい2010

8月1日(日) 会場：霞の郷

丸岡町内のボランティア同士の交流を目標としています。

ボランティアセミナー2010

9月19日(日) 会場：霞の郷

ボランティアの資質向上及び市内ボランティア団体の交流を目的としています。



卓話者の紹介 池田会員

若い頃から私自身も野球をしていた関係で、高校野球はいつも楽しみにしているが、今年の夏の朝日新聞の記事は何か例年と違った印象を受けた。早速、朝日新聞の福井総局に電話して、担当記者の方に卓話をお願いしたところ、快く引き受けていただいた。今日は、その担当記者である笹川氏に卓話をお願いしました。

卓話「感動の高校野球を取材して」

卓話者 朝日新聞社 福井総局 記者 笹川翔平

書く方が専門で、話す方は苦手と言えと言われましたが、私は高校時代から演劇部に所属していて、話すほうも得意なのですが、高校野球はあまり好きではありませんでした。井上ひさしも、「野球は、21世紀の後半にアメリカと日本とその他数カ国で支持されたに過ぎないスポーツで、23世紀には誰も覚えていない」と言っていました。今年5月に、高校野球の担当記者となりましたので、記者はいったいどんな仕事をするのかをお話させていただきます。

福井県の出場校は29校で、鳥取県の24校に次いで、全国2番目に出場校が少なく、全国1位の愛知県は188校が出場し、8回勝たないと甲子園に出られません。29校しかないとのことで、同僚記者からは「楽でいいねえ」と言われますが、確かに試合数だけを見るとそういう面もあります。

しかし、担当記者は、大会のパンフレットを作ったり、集合写真やチーム紹介、特集ページを作ったり、連載記事を書かないといけないので、各校にアンケートを送ったりしてエピソードなどを集めるのですが、私はほとんどの出場校を実際に行って来ました。

高校野球の試合結果を伝える紙面で、試合経過の他に「ハイライト」といって、実際に球場でその試合を見ていた人でも知らなかったことを書くところがあります。見えなかったものが見えてくる記事を書くわけなので、選手達のこれまでの過去やエピソードなどを知らなければかけません。これがなかなか大変なことではあります。

今年、私が印象に残っているハイライトは、準決勝で福井商業に負けた大野高校のバッテリーの話です。大野のピッチャー宮口君とキャッチャー和田君は、勝山の中学時代からのバッテリーで、同じ寮の同じ部屋で生活して甲子園を目指していました。和田君はどんなに宮口君の調子が悪くても、監督から聞かれると「先発は宮口で行くべきです」と答えていたそうです。そして中学時代から何千回、何万回も2人の間でボールが行き来していたのに、福商に負けたあと、この2人は22回のキャッチボールをしたあと、捕手の和田君が宮口君に歩み寄ってポンと肩をたたきました。それがこの2人の野球の最後でした。

県予選の大会中は、朝8時には球場に行き、写真を撮ったり得点を入力したり戦評をまとめ、夕方6時頃会社に帰り、ハイライトを8時半頃までに書き終え、記事を点検したり、翌日の試合の資料を整理して夜12時頃帰宅しました。甲子園に行けば出場校のことだけ書けばいいのだから楽ができると思いき、こんな8日間のつらい生活も我慢しました。

福井商業の甲子園行きが決まり、私も生徒と同じ宿舎に泊まり同じご飯を食べ一緒に練習について行き記事になる取材をしたのですが、朝は6時ごろから散歩に出るのですが、話を聞きたいのでそれにも付いて行くし、練習も今年は特に暑くて大変でした。それに北野監督が今年限りで引退、選手宣誓に小倉主将が選ばれるなど、話題に事欠くことがなく、楽できると期待していたところが非常に大変でした。

小倉君の選手宣誓も、宣誓文の内容はすべて選手任せで、指示も何もありません。そこで、自分達が宣誓文を考えるのですが、下書きの中に「今年は宮崎で口蹄疫などがあり、今日本は沈んでいます。」だから自分達が勇気つけたいと続くわけなのですが、野球に打ち込んでいる一人の高校生が、自分の住んでいる国が沈んでいるという認識を持っていることに、私は大変ショックを受けました。高校生が何が原因でそういう閉塞感を感じていて、そういう時代に自分も生きていとも思いました。



福井商業はいなべ総合との1回戦を6対0で快勝、報徳学園との2回戦は2対4で負けましたが善戦しました。甲子園球場で何万人もいるお客さんの前で、選手達が戦う姿は不思議と胸を打つものがありました。実は、福井商業のグラウンドは野球部専用ではなくサッカー部と共用していて、雨の日には自転車置場で筋トレをし、室内練習場も木造でボロボロなのです。私は、23世紀には野球をみんな忘れたとしても、この選手の記事をしっかりと伝えていかなくてはいけないと思わせる何かがありました。その何かがあったい何かはまだうまく言い表すことができません。

福井に帰ってきてから、北野監督に3年生はもうゆっくりしているのかと伺ったら、今日も3年生はみんな練習に来ていたと言われビックリしました。甲子園から帰ってきて、もう引退する3年生が後輩の練習の手伝いをするのが、準優勝した78年の数年前からの伝統となっているのだそうです。最初に引用した井上ひさしが、小林多喜二を描いた「組曲虐殺」という戯曲の中で、小説を書くということを多喜二は「世の中のモノを書く人は沢山いますが、たいていは手の先か、体の一部分で書いている。それではいけない。体全体でぶつかっていっかなきゃねえ」と言っています。このモノを書く人というところを野球をする人に置き換えてみると、体全体で甲子園を駆け抜けた福井商業の選手達を思い浮かべることができます。多喜二の話しの続きで、「体ごとぶつかっていくと、かけがえのない光景が、原稿用紙の上に銀のように燃え上がらせるんです。」福井商業の選手達が甲子園という舞台で輝いていたあのかけがえのない光景を、私は余すことなく伝えることができただろうかと感じている次第です。

これで、私の話を終わらせていただきます。

インターシティ・ミーティング第5組(I・M)に参加 9月25日(土)

『地域を育み、大陸をつなぐ』をテーマに福井市内のAOSSA 8階県民ホールで開催されました。

丸岡ロータリークラブより23名が参加し、松島トモ子氏の記念講演「多くの人たちとの出逢いの中で」とロバートF・クワン氏の「大陸をつなぐ」講演を拝聴しました。

懇親会は、福井商工会議所B1コンベンションホールで行われ、栗田ガバナーや松島トモ子氏と笑顔で記念写真を撮りました。



9月22日(水) 1585回例会

林田会長挨拶

クラブ協議会を開催します。協議議題は「栗田ガバナー公式訪問にそなえて」についてです。高尾幹事より当日の内容を説明してもらいます。

高尾幹事説明

10/1(金)クラブ協議会プログラムについて説明。(クラブ活動報告書参照)

- ① 進行説明
- ② 写真撮影(ネクタイ着用)
- ③ 当日の出欠を確実に確認(空席の無いように)
- ④ 質問内容等、事前に準備をしておくこと。
- ⑤ 各委員長は活動計画内容をまとめておいてください。
- ⑥ 内容を把握しておいていただき、栗田ガバナーに助言を頂けるようにしていただきたい。
- ⑦ 時間が限られているので簡略にお願いします。
- ⑧ 途中、模様替えの協力をお願いします。



「栗田ガバナー公式訪問に備えて」

堀江邦旺ガバナー補佐

栗田ガバナーはR Iのテーマにそってスローガンを挙げております。

「真のロータリアンを目指して」ロータリーを良く学び、変化を知り、忘れたことを思い出そうということです。

まず第1点目ですが、23-34の決議のことですが是非ロータリアンとして理解していただきたいと思ひます。これはいかに利己的欲求

と他人に奉仕しようとする感情の間に存在する矛盾を和らげようとする人生哲学であり、ロータリーの最も基本とするところでもあります。このことをロータリーに入会して会得していないと入会している意義がないわけで、経済的理由にしても少しの不満があっても退会することとなるわけでありま

「最もよく奉仕する者、最も多く報いられる」という実践理論の原則に基づくものである。

第2点目ですがCLPについてですが、クラブの運営管理をいかに効果的なものにするかと言うことでありまして、最初の時点では委員会の構成、即ち形から入らないと無理なのでそうしてきましたが、3年を経て内容、実務をどうするか、長期計画など9つの要素即ちベストプラクティス最善の実践方法を理解することが肝要であります。

第3点目DLPですが、これは地区組織のことでしていかにクラブを支援するかということで地区の委員会を大きく変えて行っているものであります。

第4点目RLI (Rotary Leadership Institute) ロータリーリーダーシップ研究会のことですが、ロータリーの組織や活動に関して、正しく、深い知識を持ち、高い教育的な経験を備えた指導能力のあるロータリアンを支援するために活動している組織であります。つまり将来のロータリークラブの指導者を養成することでありま

第5点目ですがロータリー財団のことですが本年より2650地区はパイロット地区に選ばれて大きく変わりました。世界531地区のうち100地区、また日本34地区のうち6地区がパイロット地区になり今までより手続きを簡素化し、地域ニーズに迅速に対応し世界の優先的ニーズに焦点を絞り、持続可能で大規模なプロジェクトを推進し奉仕の成果をもっと確実なものにすることとなりました。詳細な内容につきましては次回の機会に譲りたいと思ひます。

第6点目につきましてはポールハリスの語録の中から個人の資質についてお話したいと思ひます。

老若に関わらず全ての人に共通する責任は、徳の上でも、精神の上でも、肉体の上でも資質を良く保持し、もってそれらを最もよく活用することである。ある個人の素養がいかなるものであるかというよりも、むしろその素養を善用するかが問題であります。比較的小さな、あるいは少ない能力を持つに過ぎない人でも、そうした能力を良く効果的に運用する人であるならば大いに称賛されるべきであり、甚だ豊かな資質に恵まれていても善用しなければ、自らを省みて恥ずべきことでもあります。

ロータリアンは現状に甘んじることなく創意を發揮しなければならないのであって人類愛実現の方法と手段を見つけるということに実業家としての力を向けなければならない。

変わってロータリーを楽しむとはどういうことなのだろうか。

自らが求める意識を持ち、ロータリーの深さを知ることが楽しむことである。卓話にしても、奉仕活動にしても、真剣に前向きに考えてこそ、そこに普遍的な物の考え方がどんな職業人にも有益なものになるのではないか、幅の広い深い人間形成ができるのではないか、そして豊かな人生が待っているのではないか。それは自らを正し、研鑽を積むことが必要である。このことが真のロータリーを楽しむことではないか。



